

発行所 (郵便番号100)
 東京都千代田区丸の内2-4-1
 丸の内ビルディング781号室
 社団法人スウェーデン社会研究所
 Tel (212) 4007・1447
 編集 中 嶋 博
 責任者
 印刷所 関東図書株式会社
 定価200円 (年間購読料参千円)
 1989年1月25日発行
 第21巻 第1号
 (毎月1回25日発行)
 昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol.21 No.1

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
 (The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
 Marunouchi-Bldg., No.781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

年頭のご挨拶

New Year's Message

理事長 西村光夫

Chairman of the Board of Directors, Prof. Teruo Nishimura

1989年の新年をみなさまお健かに迎えられたことと存じます。恒例により一言新年の御挨拶申し上げます。まず今年の秋には当研究所が産声をあげてから満22年となります。“よくまあ無事で”、という言葉がありますが、一昨年この研究所が盛大な成年式をあげることができ、さらに前進を計ろうとする段階に到りましたことは、その間のさまざまな喜びや苦勞を顧みますと、私にとって、少なからざる感慨を憶えるものがあるのであります。いつも申すことでありますが、第一にはスウェーデン及びわが国の官民、とりわけ有形、無形の援助を惜しまれなかった法人、個人の会員のみなさま、研究所のため無償の援助を続けて下さっている関係者の方々に対する感謝の気持ちであります。この方々の深い御理解と御協力がなかったら、当研究所が今日まで活動を続けることは決してできなかつたであらうでしょう。誠に有難いことと心より御禮申し上げるとともに、これからも倍旧の御懇情を賜わるよう御願ひ申し上げます。

次に感じますことは、ここ数年来日瑞両国の経済が共に拡大発展の歩を進めると共に、両国間の交流と相互理解とが著しく進歩したことあります。これはまことに慶ばしいことで、例えばスウェーデンの企業の日本への進出が急速に増加し、その多くの方々が、当研究所やその姉妹機関である日瑞基金に対して、理解と協力を示されたことあります。われわれの仕事は直接それら企業の活動に御役にたちませぬけれども、日本の国民にスウェーデンの国柄や、政治、経済、文化に対する理解の増進に努力を傾けてきたわれわれの活動は間接的には、お役に立つところ少くないと信ずるのであります。これはわれわれにとり大いに張合のあることでありますし、これからも一層の尽

力を致したいと考えております。

ここで少しく去年一年のことを顧りみてみますに、毎月の会報の発行、折々の講演会、研究会の開催、視察団の派遣等恒例の行事のほか、われわれの会員の松下正三氏(元外交官)が百人一首のスウェーデン語への翻訳と詳細な解説を完成し、立派な本として上梓され、また瑞日および日瑞辞典も完成出版され、ウプサラ大学から名誉博士の学位を贈られたことなどはまことに大きな業績として、心から嬉しく思ったことであります。また顧問をして頂いている小野寺夫人が、「バルト海のほとりにて」の出版で洛陽の市価を高められたこと、また同夫人が有名なスウェーデンの探検家スウェン・ヘディンと直接お親しかつたことを本誌上で語って下さったことなど、日瑞の文化交流の上で、まことに大事なことと思われ、これまた大変嬉しく思ったことであります。

スウェーデンの福祉政策、中立外交、武装中立、清潔な選挙、与野党の相互理解による穏健な政治を可能にしているスウェーデン国民の政治意識の高さ等々は、国の基本方向について容易に意見のまともらぬ日本としては、まだまだ学ぶべき、また研究すべきところが多く、当研究所のなすべき仕事は非常に多いと思います。諸賢の一層のご理解ご協力を切に御願ひして止まぬ次第であります。

目次

年頭のご挨拶	西村光夫	1
Season's Greetings		
…アニータ・ネースストレーム報道官		2
迎春	松前重義	3
スウェーデンのお正月	三瓶恵子	3
一般消費税一問題は使途	松下正三	4
SIP ニュース		5
研究所の活動メモ(63年)		6

Season's Greetings

Mrs. Anita Näsström, Press Attaché,

Royal Swedish Embassy

I take the pleasure in greeting the members of the Japanese Institute of Social Studies on Sweden and wishing all and everyone a prosperous new year.

This year JISSS has pursued its many-sided activities, centering on publishing, language classes and various academic exchange.

Under the leadership of Prof. Olof Ruin, a prominent group of scholars from the University of Stockholm visited Japan this year. Their contacts with JISSS was most fruitful and rewarding.

The language courses and the yearly study visits to Sweden organized by JISSS is an important undertaking for furthering the good relations that exists between our two countries.

During the fall of 1987 the Nordic countries through the Nordic Council of Ministers undertook a major cultural event "Scandinavia Today". The event was a great success and contributed in a significant way to the growing interest for Scandinavian culture in Japan. Both within the musical and art fields there are now plans to follow up this important event.

In the commercial field no less than 75 Swedish companies are permanently represented in Japan, many of them with their own production facilities. As a matter of fact, Sweden is the only country which maintains a positive investment balance with Japan! The trade between our countries has developed in a positive way and this year Sweden has increased its export to Japan with 30%.

Sweden and Japan are both at the forefront of research in areas of importance for tomorrow's world. Technical and scientific cooperation is thus an important element of Swedish-Japanese cooperation. An important event in this field is the plan to establish a scientific cooperation between Japan and the Karolinska Institute in Stockholm.

In Sweden parliamentary and municipal elections were held in September. These are the first elections since Prime Minister Olof Palme was killed in 1986.

The Social Democratic Party remains the single largest party and Prime Minister Ingvar Carlsson continues in his post. For the first time in 70 years Sweden will have a new party in Parliament, the Environmental Party.

The cooperation between Japan and Sweden is increasing in a most fruitful way and I greatly appreciate your efforts to promote friendship and understanding between Japan and Sweden.

We at the Embassy would like to extend our best wishes to all members of JISSS. It is an honour and a pleasure for us to offer our support and extend our services in any way we can to JISSS' endeavours in 1989.

迎 春

年頭に当り、皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

会 長 松 前 重 義

< Stockholm 通信 >

スウェーデンのお正月

New Year Celebration in Sweden

会 員 三 瓶 恵 子

Ms. Keiko Kjellsson-Sampeï

1988年の夏は異例の暑さでした。秋もまた晴れの日が多く、黄葉・紅葉が美しく陽光に映えていました。11月に入ってから急に寒くなり雪も降って例年より早く本格的な冬になってしまいました。それでも毎日太陽が顔を出すのでいつものような重苦しい気分にはなりません。例年ですと11月は雲が厚く空をおおい、ちょっと気晴らしに自殺でもしてみようかと思うような季節なのですが、今年は人々の顔も心なしか明るく、寒さに対するグチもあまりきかれないようです。

毎年11月半ばごろから街のクリスマスの飾りつけが始まります。建物の間に電球をつけた雪の結晶のデコレーションが下げられ、街の広場等人々が集まるところには大きなクリスマスツリーがたてられます。クリスマスは何ととってもスウェーデン最大の国民行事で、日本のお正月フィーバーにも似た騒ぎになります。

クリスマス・フィーバーは12月24日のプレゼント交換で頂点に達し、その後、急に熱が冷め退屈な冬休みが始まります。といっても1988年のクリスマス休みは“雇い主特注の冬休み”で、休日と祝日が重なって、普通の勤め人は年次休暇をとらない限りしっかり30日まで働かされるような日程になってしまいました。

クリスマスとお正月の間の日々は“中間の日々” mellandagarna と呼ばれ、商店が特別安売り mellandagar-rea をする時でもあります。ちょうどそれにあわせたかのように税金の払い戻しがあり（2月の税金申告の査定結果がようやく12月に出るわけです。もちろん場合によっては追加で税金を払いこまねばならない人もいるわけですが、天引きをされているサラリーマン達へはたいいてい雀の涙ほどが返ってきます。）、久しぶりにごちそ

うを食べゆっくり休んだ人々は店々のパーゲンに出かけていきます。

街に残った人々の冬の楽しみといえばテレビが第一です。都会ではケーブルテレビによりチャンネルが増えたとはいえ、まだまだため息が出るほどつまらない番組が大半を占めています。目玉商品は古い映画で、ちなみにこの冬のクリスマス・正月特別映画放映は、メル・ブルックスの“ハイ・ソサエティ”、ジュリー・アンドリュース主演の“サウンド・オブ・ミュージック”、ビートルズの“イエロー・サブマリン”、オリビア・ハッセー主演の“ロミオとジュリエット”等で、古い映画しか買えないスウェーデン・テレビの貧しさがしのばれます。

大晦日の夜になると貧しい若者は公民館のダンス・パーティーへ、少しお金のある中年のカップルはレストランへ行き、新年の鐘をききながらシャンパンを飲んで祝います。子どもがいる家族や老人達は家でテレビの“ゆく年くる年”に相当する番組を見て、ジュースやシャンパンで乾杯します。毎年ストックホルムのスカンセン公園で大晦日の夜おそく恒例の詩の暗唱がおこなわれ、全国にテレビ・ラジオ中継されます。この詩の暗唱がいつごろから始まったのかはよくわかりませんが、少なくとも3、40年は続いているものようです。昔はアンデシュ・デヴァルという俳優が、ここ2、3年はヤール・クッレという俳優がテニソンの“新年の鐘”という詩（もちろんスウェーデン語訳で）を白い息をはきながら暗唱し、彼が暗唱し終わると（そこはプロですから時間はピッタリです）新年をつげる鐘が全国の教会から一斉に響きわたるのです。それと同時にあちこちで花火があがります。花火は夏の風物詩と思っている日本人にはち

よつとしたカルチャー・ショックですが、スウェーデンで花火といえば新年の祝いの象徴なのです。

新年の祝いといえばそれだけで、別にクリスマス以上のごちそうを食べるわけでもなく、もちろんお年玉や年賀状もなく、2日から仕事が始まります(学校は7日頃から)。

最近ふえてきた冬休みのすごし方として、雪の多い地方に山小屋を借りてスキー三昧で過ごすものや、また反対に寒さ・暗さをのがれて暖かいス

ペインや北アフリカに海水浴に行くもの等があります。どこでむかえるお正月でもやはり新年になる瞬間には眠い目をこすりながらシャンペンを飲み、新年のあいさつ“Gott Nytt År”をかわし、ほとんど守られない“新年の抱負”nyårslöfteを語ったりするようです。

1989年は日瑞両国にとってどんな年になるのでしょうか?世界平和と日瑞両国の発展に少しでも貢献することを私の新年の抱負としましょうか。

寄稿

一般消費税

— 問題は使途

Omsättningskatt

会 員 松 下 正 三

Mr. Syozo. Matsushita

政府与党の執念となっている一般消費税に対する反対が各野党及び多くの国民の間に澎湃として起ってから既に3年近い歳月が流れた。

この問題について不思議に思われてならないのは、この問題で最も重要であるべき消費税の使途についてのつっ込んだ論議が与野党間及び国民の間でも殆んど行われていないことである。

消費税反対の主な論拠は「斯る大衆課税は一般国民の負担を増すだけである」ということにある。これは一応尤もな論理である。しかし、たとえば3%の消費税がそっくり国民大衆に還元されることになれば話は別である。それは、国民資源の(公正な)再分配であるからである。

高福祉・高負担で知られる北欧スウェーデンは世界有数の高率直接税に加えて更に間接税として実に23.46%の付加価値税が課せられている。しかし、その多くの部分が国民大衆に直接還元(再分配)されているが故に国民はこれに耐え、積極的に政府を支持している。去る9月18日に行われた国会選挙でも与党の社会民主労働党(社民党)が引続き絶対多数を確保できた所以である。

経済大国と称せられるわが国の社会保障制度で最もおこなっている分野は老人介護と教育費負担である。家庭の大きな悩みである老人介護の多くを家族(特に嫁や老人である配偶者)やボランティア(大多数は比較的所得が少ない)に頼っている現状は速かに改善されるべきである。ボランティア

は慈善行為であり美徳であるが、受ける側から見れば感謝を強いられ、往々遠慮と屈辱感を伴う。加えて、その性質上継続性の不安や質的ばらつきがあり、善意だけでは満たされない多くの要素を伴う。斯る理由で、寄付等も含めた慈善行為に頼らず、税金をもってこれを賄うこと、即ち、国民の権利としての福祉は、近代民主主義国家社会における社会保障制度の基本理念となっている。為政者はこの事実を十分認識すべきである。

スウェーデンの地方自治体には国庫補助の下に現在約85,000人の有給ホームヘルパー(吏員)がいる。この数字をわが国に当てはめると、人口比率及び65歳以上の老人比率(スウェーデンは約17%)を勘案すれば約60万人に相当する(註、受益者は勿論収入に応じて経費の一部を負担する。因みに、地方公務員の約半数は社会保障関係の要員である。)

教育費は多くの場合、一般家庭の支出の最も大きな部分を占め、極度に家計を圧迫しているが、スウェーデンは教育の機会均等の立場から給食費は勿論、大学卒業まですべての学部を通じ入学金、授業料等一切無料である。更に、16歳まで年間約13万円相等の児童手当(註、3人目は5割増、4人目は10割増)及び大学生に対し、年間約6万円相等の補助が与えられる(何れも1985年現在)。

一般消費税反対のもう一つの理由は、当初3%でスタートしても、いずれ段階的に引上げられる

のではないかと危惧から来ているが、反対するのであれば消費税そのものに対してではなく、その用途に対して反対するのが本筋である。国民に公正に再配分される限り適度の消費税はむしろ歓迎されるべき性質のものである。

社会保障先進国の仕組みは、(1)経済は自由競争を基盤とする資本主義経済であって、(2)それによって得られた成果を高率税制を通じて吸収し、(3)それを社会保障制度を通じて国民に公正に再配分するのが共通のパターンである。

政府与党は、減税の財源として消費税を充てるとしているが、この減税案こそ眉唾もので、真のねらいは高所得層の減税にあることは明白である。この事は、従来70%であった最高税率を本年度は60%に下げ、明年度は更にこれを50%に下げようとしていることからでも明かである。最近のように国民の所得格差が急速に拡大しつつあるときは、

逆に高所得層の税率上げを計るのが民主的税制の常道である。我々は美辞麗句に惑わされることなく、今後とも油断なく看視を続けなければならない。

常識的な試算であるが、60万人のホームヘルパー（日本の場合は差し詰め多数の有給ボランティアを採用、教育し、これを効果的に組織化することが適当と考えられる。—金持ちのボランティアは少ない）の年間経費1人200万円として計1兆2,000億円となる。これは1%の消費税で十分賄える額である。また、300万人の学生に1人年間120万円補助するとして計3兆6,000億円となり、両者併せても3%程度の消費税で賄える筈である。この効果は、一般大衆にとって雀の涙ほどの減税とは比較すべくもない。

斯る形での資源の再配分は、同時に、内需の拡大、地域経済の活性化に資することは明白である。

< SIP ニュース >

物価並びにコスト上昇率の引き下げ、経済の効率化を旨とする政府の一括政策

昨年10月26日、スウェーデン政府は物価並びにコスト上昇率を引下げ、経済をより効率的にすることをねらった多くの構造的かつ供給面の政策を提案する法案を提出した。大蔵省によれば、それらの政策は、労働力の供給増、労働市場の流動性の改善、建設部門の過熱の抑制、経済競争の一般的強化等を目的としたものであるということである。

現在、生産及び投資は成長しており、失業率も低い。商業部門は高い収益性、拡張、楽観論によって特徴づけられている。ただし、同時に、経済の業績が一部の部門の過熱や労働力不足を引き起こし、それが諸外国に比して高いインフレ率の要因となっている。物価並びにコスト上昇率が高いことは、相変らずスウェーデン経済における特徴的な問題であり、経済政策にとっての優先事項はインフレ抑制である。

政府によって精選、提案された政策のうちには家計の所得税を1989年度1月1日付で3%引き下げるといったものがあったが、これは来年度の賃金上昇の抑制に貢献するとともに、労働力供給と貯蓄の双方にプラスの効果をもたらすものと期待されている。また、多くの退職した人々のために現行の極めて高い限界所得税率を抑える措置がとられる見込みである。さらに、税金を期限内に支払う企業や個人への報奨金制度も提案されている。

労働市場政策の一環としては、労働力の供給増と地理的流動性の改善をねらった政策が提案された。また、政治亡命者や他の移民が今より楽に職を見つけることができるようにするための政策も提案された。

建設部門の過熱を抑え、住宅建設を増やすべく刺激するために、ストックホルム及びヨーテボリ地域における非優先的建設に課される現行の制限は1990年末まで延長される見通しである。さらに、同様の制限が国のその他の地域にも適用されることになろう。

政府はまた、食料価格の引下げとインフレ抑制のために、輸入保護の削減並びに既存の市場規制の見直しを含む農業政策の立て直しを発表した。この他、繊維及び衣料部門関連の政策立て直しも発表された。既存の輸入制限を漸次撤廃するという政策案は、スウェーデンの物価下降をもたらすと同時に多くの発展途上国にプラスの効果を与えるであろう。

最終的に、政府は経済における競争状況の徹底的再検討を発表している。審問委員会は既存法規とその影響に関する研究及び分析を行ない、競争を刺激し、結果的には物価の下降に寄与するような政策を

提案する見込みである。

スウェーデンの新しいテレフォンサービス—61カ国語の同時通訳

スウェーデン電信電話局が先頃、新規のテレフォンサービスを開始したが、それは法律や医療サービスの特別訓練を受けた通訳の助けを借りて、スウェーデンと外国人コミュニケーションをはかろうというもので、扱う言葉は61カ国語に及ぶ。

この電話翻訳システム、テレトルフ (Teletolf) は昨年9月に始められたが、そのサービス開始に際しては電信電話局と移民局の密接な協力があつた。因みに後者は通訳の供給を受け持った。新サービスを受けるには、少なくとも1日前に申し込む必要があり、料金は通常の電話料金プラス157クロナ(1分間につき)である。

電信電話局の国際サービス課は、同サービスを最も有益と考えるのはビジネスの顧客であろうと思われるが、私的個人にも同様に役立つであろうと述べている。因みに、夏の間は、欧州その他の外国旅行中の子供達の所在を知るために助けが必要な両親からの需要が絶えなかった。

研究所の活動メモ 63年

- | | | | |
|-------|---|--------|--|
| 1. 13 | ニルス・ホーヌマーク氏に日瑞基金の理事就任を依頼 | 5. 21 | 社会保障研究所主催の C. Lindmark 保健・福祉庁部長および G.Sundstrom イエンスレーピング老人研究所研究員によるスウェーデンの福祉政策に関する特別セミナー(コメンター丸尾直美理事)に共催 |
| 1. 21 | Eva. Heckscher 女史より弔電の礼状入手 | 23 | スウェーデン語講習会、本年度第2回(通算67回目)開講 |
| 2. 22 | スウェーデン語講習会、本年度第1回(通算66回目)の開講 | 6. 16 | 福祉問題研究会(竹崎孜氏)—スウェーデンの最近の家族制度をめぐって—開催 |
| 3. 2 | 松下正三氏にウプサラ大学の名誉哲学博士号授与の祝電送付 | 8. 24 | 北欧幼児保育調査視察団(団長、荒井冽氏)スウェーデン、デンマーク、西ドイツに出発(参加団員、27名)—9月4日帰国 |
| 3 | 「Swedish Model in Palme Ara」シンポジウム開催打合せ | 9. 20 | 松下正三氏よりスウェーデン語訳「小倉百人一首」寄贈 |
| 8 | 大使館広報部へ本年度プロジェクトとして日瑞関係統計作成、関心事アンケート等提案 | 10. 3 | スウェーデン語講習会、本年度第3回(通算68回目)開講 |
| 9 | 大使館広報部で社会保障研究プロジェクト案につき打合 | 10. 19 | 外務省へ公益法人調査表を提出 |
| 12 | 幼児保育研究会(荒井冽氏主査)開催 | 11. 24 | 政治問題研究会(岡沢憲美理事)—スウェーデンの総選挙、特に緑の党の躍進—開催 |
| 17 | 日瑞複合材料セミナー開催 | 12. 3 | ルンド大学ビヨン・タールベリィ教授のスウェーデンの経済成長と福祉システム—日本との比較において—中央大学経済研究所主催の公開講演会に協力 |
| 4. 7 | 日本万国博覧会記念協会の補助説明会に出席 | 12. 20 | 福祉問題研究会(三瓶恵子氏)最近のスウェーデンの社会事情と題して開催 |
| 11 | スウェーデン派遣研究員本年度合格者決定 | | |
| 13 | スウェーデン技術開発庁日本担当課長 Eric von Bahr 氏と懇談 | | |
| 14 | ストックホルム大学 Olof Ruin 教授の「Swedish Model and Erlander—Palme Era」(スウェーデン福祉社会の現状と見通し)と題する公開講演会を大使館の援助により開催。(パネラー、原剛、岡野加穂留先生) | | |

〈ご案内〉

高齢者のヘルス・ケア—会議

“Health Care for Elderly People”の会議が、本年6月5日から同月9日まで、ストックホルムで開催されます。申込は3月1日までとなっており、ご関心のむきは至急お申出下さい。参加者多数の場合は、グループ視察団を編成の予定。